

Run & Up

[ランナップ]



SPRING 2014
Vol.10 No.1 通巻37号

人が好き・街が好き、いきいき・はつらつ、在宅ケアを支える仲間たちを応援します。

●Basic Eye—インタビュー

文化としての看取り 前編 ~日本人の死生観~

山折 哲雄 先生 [宗教学者]

●QOLの観点から栄養を考える—第21回

監修:川越 正平 先生 [あおぞら診療所 院長]

在宅療養高齢者の栄養の課題

大塚 理加 先生

[独立行政法人国立長寿医療研究センター在宅連携医療部 特任研究員]

●訪問看護ステーション発—私たち、こうやっています! File 25

新卒訪問看護師の育成

海南訪問看護ステーション (愛知県弥富市)

●行ってきました!—訪問看護師編

リハビリテーション・ケア合同研究大会 千葉 2013

REPORTER

蘭牟田 順子 さん [あおぞら診療所 看護師]

●在宅ケアQ&A—第1回

男性介護者への対応

回答者:増田 久子 さん [八幡医師会医療・福祉センター 管理者]

●在宅こぼれ話—第1回

世間話ベイスドメディスン(SBM)のすすめ

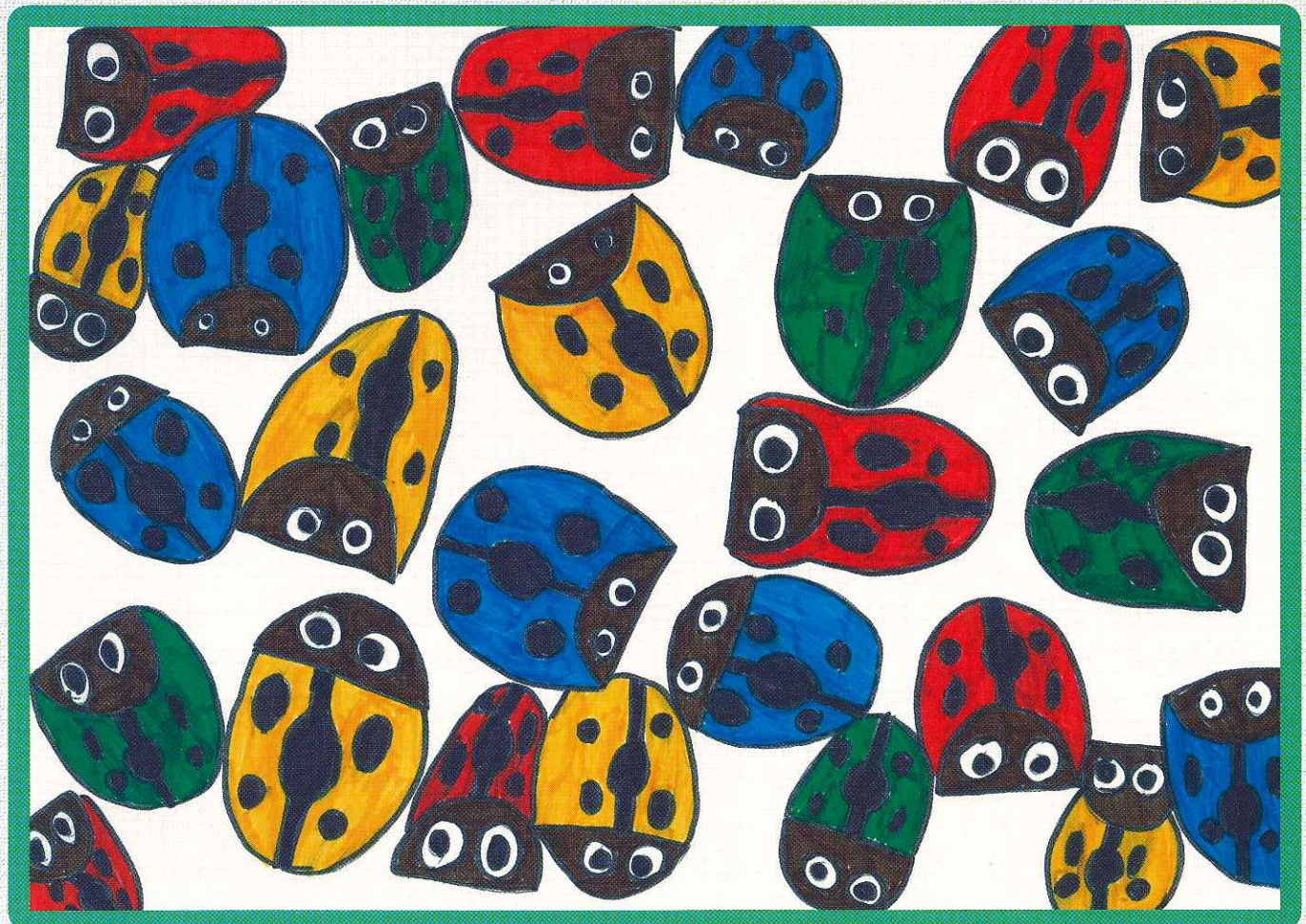
太田 秀樹 先生

[医療法人アスミス 理事長]

●FORUM

がんと栄養

竹山 廣光 先生 [名古屋市立大学大学院医学研究科消化器外科 教授]





世間話ベイスドメディスン(SBM)のすすめ

在宅医療をはじめて23年たった。おじいちゃんを自宅で看取って、おばあちゃんを、そしてその息子をと、一族で何人も最期までかわらせてもらったお宅がたくさんある。

往診に行くと家族の集合写真を見ると、そういえば、この人も、この人も、この人も……、病気を治さないで死亡診断書を書いている。辞書には「医療とは医術を用いて病気を治すこと」とあるが、僕は病気を治さない怪しい町医者かもしれない。でも、おばあちゃんが亡くなるときに孫嫁のお腹にいた赤ちゃんが看護学校に通い始めたり、おじいちゃんの面倒を見ていた高校生の娘が介護士として仕事を始めたりと、在宅医療をやっていたからこそ、家族の成長を、まるで家族の一員のように微笑ましい気持ちで見守ることができる。きっと在宅でケアした物語が、自分の進路を決めるときの動機になったに違いないと思うと、病院の勤務医だったときとは比較にならないぐらい、患者さんや家族と親しい関係で仕事ができることにやりがいを感じる。

* * *

ところで、僕の外来には、在宅介護を体験した家族がたくさん受診してくれる。ご主人を最期までお世話したご婦人たちがほとんどで、あたかもレディースクリニックの様相を呈しているが、往診しているうちに気心も知れて、フランクな会話ができるようになることが多い。血圧や糖尿病の管理をしているだけだ

から、既に病気の話はネタ切れで、診察室ではもっぱら世間話に花が咲く。時にはシリアスな「死に方」まで話題にのぼる。

最近、在宅医療への社会の関心が高まり、取材を受ける機会も増えた。テレビや週刊誌だけでなく、スポーツ新聞まで在宅医療を記事にするようになったのにはすごく驚く。「終活」という言葉が流行語大賞にノミネートされたほどだから、自分の人生は自分でデザインしようと考え始めた患者さんはたくさんいるに違いない。

「先生、私はチューブで生かされるのはごめんです。私のときも自宅をお願いしますね」なんて、懇願されることもあるが、「僕より先に逝かねばだめだよ」と、不謹慎な条件を堂々と提示できる。在宅医療で培った信頼の証だ。

* * *

在宅医療は病院医療の受け皿として語られているような気がする。しかし、在宅医療は外来の延長線に存在すると考えた方が、その本質はわかりやすい。足腰が弱いという表現に象徴されるように年を重ねると、いつも通院していた診療所に通うことが難しくなる。そんなときに信頼しているかかりつけ医が往診してくれると、患者さんは安心に違いない。あまり難しく考えずに、患者さんや家族と世間話をするような気持ちで、暮らしの中に気楽に医療を運ぶ。そんな在宅医療があってもよいと思っている。